掲載日:2016年02月21日，面名:社会３，記事ID:KIJ20160221_A0019000250308010
(C)山梨日日新聞社

ダウン症の子への関わり方を考える

山梨大でフォーラム

日本ダウン症協会県支部「芝草の会」（野中文子会長）は20日、中央市の山梨大医学部キャンパスで山梨ダウン症フォーラムを開いた＝写真。

世界ダウン症の日（3月21日）を前に開催していて3回目。医療や福祉の専門職、ダウン症の子の保護者ら約100人が参加した。講演や分科会で「接し方、かかわり方」をテーマに、子どもから大人まで発達段階における課題について考えた。

講演で、臨床遺伝専門医で小児科医の長谷川知子さんは「ダウン症は病気でも障害でもなく人類の多様性の一つ」と説明。「親や専門家であっても思い込みや根拠のない先入観があるのではないか。一人の人間として何でもやらせ、結果は焦らないでほしい」などとアドバイスした。

野中会長は「会の創設から40年を迎え、成人期の課題も見えてきた。関係者が話し合う機会にしたい」と話した。